

都道府県番号	32
都道府県名	島根県

・学校名及び規模

出雲市立大津小学校																	
第1学年		第2学年		第3学年		第4学年		第5学年		第6学年		特殊学級		計		教員数	
児童数	学級数	児童数	学級数	児童数	学級数	児童数	学級数	児童数	学級数	児童数	学級数	児童数	学級数	児童数	学級数		
113	3	124	3	105	3	99	3	107	3	139	4	8	3	695	22	43	

・実践研究の概要

(1) 主題(テーマ)

成長欲と知恵をもち、自ら道を拓く子ども ~ Get Think Do ~

(2) テーマ設定の趣旨

子どもたちはもともと「わかりたい」「知りたい」「伸びたい」という欲求を持っている。その欲求をもとにして変化の激しい時代の中で子ども自らが強い意志を持って、様々な課題に積極的に挑戦し、たくましく生き抜いていく力(生きる力)が求められている。

そこで本研究の実践では、分かたり体得したりする喜びを味わい、論理的に思考したり、筋道を立てて考えたりする力を高め、また自分で調べたことや考えたことをわかりやすく他に伝えていく力を高めていくための指導方法や指導体制について追求していく。

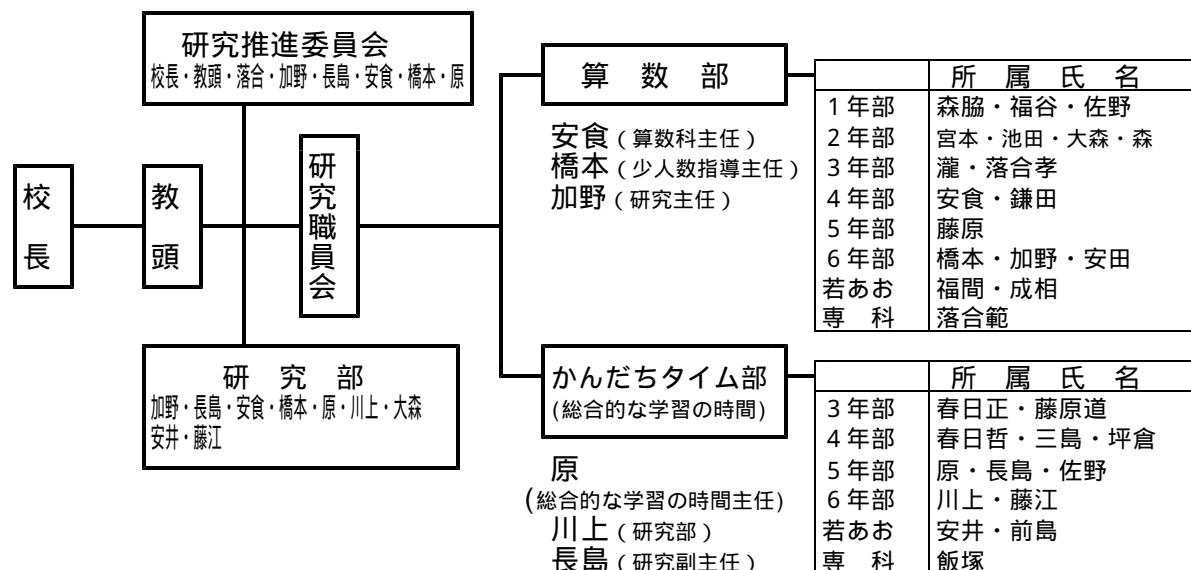
研究の中心教科等として、「算数科」と「総合的な学習の時間」を取り上げ、基礎的・基本的な学習内容の確かな定着を基盤としながら、「生きる力」としての学力(関心・意欲、追求力、コミュニケーション能力、判断力、表現力等)を身につけた子どもの育成を目標とする。

・実践研究の内容について

(1) 研究体制の工夫・・・研究実践のために共通理解したこと

- ・本研究は「確かな学力」を身につけた子どもの育成をめざして、指導体制と指導方法改善のためのものであり、日々の授業実践を中心に据えたものであること
- ・「学力」とは基礎・基本的な学習内容の定着を基盤として、関心・意欲、追求力、判断力、コミュニケーション能力、表現力などを含めた総合的なものであるということ
- ・「子どもたちにつけておきたい力」「つきたい力」を確認し、日々の授業実践において常に意識しておくこと。
- ・全クラスで研究授業を実施。一部教員の研究ではなく、全教職員の共同研究であること。

【実践研究の組織図の事例】



(2) 実践研究の内容

少人数授業などきめ細かな指導について（習熟度別の少人数授業）

事例1・・・各学年部での指導体制の実際（算数科においての例）

学年	クラス数	児童数	指導体制と指導方法
第1学年	3	113	学級担任とスクールサポーターによる習熟度別授業、TT授業
第2学年	3	124	学級担任と少人数加配教員、スクールヘルパーによる少人数授業 （1クラスを4名で指導にあたる体制）
第3学年	3	105	学級担任と少人数加配教員による習熟度別授業
第4学年	3	99	教科担任とスクールヘルパーによる習熟度別授業、TT授業
第5学年	3	107	教科担任と少人数加配教員による習熟度別授業
第6学年	4	139	学級担任と少人数加配教員による習熟度別授業

スクールサポーターは島根県からの加配教員
 スクールヘルパーは出雲市の施策からの加配教員

事例2・・・2年生算数科における習熟度別の少人数授業の事例より

【習熟度別グループに分かれるための手順】

- ・単元の指導内容や指導方法を保護者と児童に知らせ、親子で話し合って決める。
- ・担任は学力テストや前学期の成績を分析し、客観的な実態を把握する。
- ・単元のねらいや児童の実態に即したグループ分けになるように、児童と相談する。
- ・単元の途中でコースの変更もできる。

事例3【習熟度別コースごとの指導の流れの比較】2年生算数科（単元・ちがいをみて）

コース名	どんどんコース	じっくりコース
本時のねらい	問題場面をとらえ、自分なりに考えて意欲的に図に表し、友だちに説明できる。	問題解決をしようと自分なりの考えをもち、友だちや先生の話聞きながら、図を使って表現できる。
数学的思考	2つの数量の違いから、一方の数を求める問題をテープ図を使って思考し、解決ができる。	逆思考の問題で、一つの数量との差に気づき、小さい方の数量を求めることができる。
学習の流れ	生活科の学習体験から、お花屋さんの花の数の違いによる問題解決 15 - 4	体育会の体験から、綱引きチームの人数の違いによる問題解決 15 - 4
学習の過程	テープ図 立式・説明 類題 発展問題 問題づくり	テープ図 立式 説明 類題 発展問題
支援	テープ図 説明コーナー チャレンジコーナー（発展問題）	シール付きおはじき テープ状の色画用紙 パソコン教材（逆思考を援助する動きのある教材）
指導と評価	自分の考えを持ち、図やテープ図を利用して友だちにわかりやすく伝えることができる。 テープ図の端をそろえて2つの数量を比べる	まず自分の考えを持ち、図やテープ図を使って、友だちに説明することができる。 テープ図を使って、2つの数量の違いがわかる。

「教科担任制」の導入について

・教師の専門性を生かした指導・授業の充実を図るための教科担任制の導入

事例4・・・学年の発達段階を考慮し、3年生以上で実施

第3学年	3クラス	社会・図工・音楽・(理科)(体育)
第4学年	3クラス	算数・音楽・社会(体育)(理科)
第5学年	3クラス	国語・算数・社会・音楽・図工(体育)(家庭科)
第6学年	4クラス	音楽・家庭科(理科)(社会)(体育)

()内の教科は、2名以上の教員が「入り授業」

()がついていない教科については、完全教科担任

事例5・・・教科担任制の実施状況例（6年生関係分）

学級	国語	社会	算数	理科	図工	音楽	家庭	体育	道徳	学活	総合
6年1組	A E	G	A E	D E	I	F	C	A	A	A	A
6年2組	B E	B	B E	D	I	F	C	A	B	B	B
6年3組	C E	B	C E	I	C	F	C	H	C	C	C
6年4組	D E	B	D E	D E	F	F	C	A	D	D	D

算数は少人数指導・国語、理科はTT授業

- 6年1組担任：A（専攻教科・体育） 少人数加配教員：E 教務主任：I
 2組担任：B（専攻教科・社会） 音楽専科：F
 3組担任：C（専攻教科・家庭） 教頭（専攻教科・社会）：G
 4組担任：D（専攻教科・理科） 5年担任（専攻教科・数学）：H

事例6・・・教科担任制に対する児童の意識調査から（5・6年生関係分）

“教科担任制の学習はどうか”

調査数 242名

今まで比べてよく分かるようになった	154人	64%
今までとあまりかわらない	62人	27%
どちらとも言えない	26人	9%

“教科担任制の学習はどうか”		調査数 242名
勉強がよくわかるようになった	68人	【少数意見として】 好きな科目ができた 苦手な教科も分かるようになってきた 努力してみようという気持ちになってきた 授業が楽しくなった
難しいこともがんばろうという気持ちになった	46人	
専門の先生に教えてもらえる事がいい	42人	
いろいろな先生の教え方があるからいい	39人	

（3）成果と課題

少人数授業の実施による成果と課題

児童一人一人への指導や評価を、きめ細かく個別に行うことができ、基礎的・基本的な学習内容の定着度が高まり、児童の学習意欲も向上してきた。

既習事項をもう一度おさえた方がよい児童に対しては復習をしながら学習を進め、進んだ学習内容にも挑戦できそうな児童は、発展的な問題にチャレンジするなど、学ぶ意欲を味わうことができた。また算数的活動や実験、観察、調べ学習など児童の習熟度（理解度）や課題に合わせた学習を進めていくことで、意欲的に学習に取り組む児童が増えてきた。習熟度別グループの実態に配慮し、一人一人に応じた補充教材や学習プリントの作成など教材の開発・工夫を進めること、より意欲的に学習できるようなグループ設定・コース設定の仕方が今後の課題である。

教科担任制の導入による成果と課題

学年全体を複数の教員で指導していくことから、一人一人の児童の良さや可能性を複数の目で多面的に見ることができ、より「開かれた学年・学級経営」となった。

学年全体での指導内容が統一され、評価活動もより適切に実施できるようになった。指導法の工夫改善を図りやすく、児童にとっても多くの教員とふれあう中で新鮮さが生まれ、結果として学習に対する関心・意欲が高まってきた。

小学校段階での「教科担任制」の導入による成果を、より客観的に把握していく方法の検討と、時間割作成をより円滑に進めていく方法が課題である。

（4）成果の普及方策

- ・学力向上フロンティアスクール地区協議会等の開催（研究授業の公開）
- ・フロンティア指定校間での情報交換（研究授業の公開）
- ・研究の取組、子どもたちの学習の様子をホームページで公開中

（5）その他

- ・前期・後期の2期制による時間割の実施・・・・・・・・・・（教務部を中心に各学年部で作成）
- ・毎朝の読書タイム・・・・・・・・・・（豊かな心情を育み、落ち着いた雰囲気一日をスタート）
- ・ノーチャイム制・・・・・・・・・・（主体的に行動していく意識を高めるために）
- ・領域別標準学力検査（田中教育研究所編）の実施・・・・・・・・（分析結果を指導に生かしていく）